

令和3年度 第3回まちづくり基本方針検討小委員会 議事要旨

日 時：令和3年10月8日(金)13:00～15:00

場 所：兵庫県庁 第2号館1階 視聴覚ルーム

出席者：岡絵理子委員、角野幸博委員、皐月秀起委員、竹林英樹委員、中塚雅也委員、平田富士男委員、室崎千重委員、八木有加委員

1 議事の概要

(1) 会議の成立確認

過半数（9名中8名）の委員の出席により委員会成立。

(2) 議事録署名委員の指名（角野委員長）

名簿順により、室崎、八木両委員を今回の議事録署名委員に指名。

(3) 審議事項

事務局から、指標の設定、めざすべき将来像及び取組の方向性並びに骨子（案）について説明し、その後意見交換を行った。

2 主な意見交換

(1) 指標について

【委員】

市町職員意識調査では、市町職員が市民としてどう感じているかを聞くのか、それとも市の職員としてどう感じているかを聞くのか。

【事務局】

一市民としてだけではなく、まちづくりに現場で携わっている職員としての率直な感覚を聞きたい。

【委員】

市民を一番近くで見ている人の感覚を把握するということか。その人たち自身が幸せかどうかということも聞きたいところだが。

【事務局】

どのような聞き方をするかは今後調整していく。

【委員】

県民意識調査の共通質問項目であるものと、追加するものがあるということか。

【事務局】

そのとおり。

【委員】

質問項目はビフォーアフターを比較できるように設定することは可能なのか。

【事務局】

たまにマイナーチェンジはしているが、基本的には毎年同じ内容を継続して聞いている。

【委員】

「住んでいる地域にこれからも住み続けたい人の割合」という指標が挙げ

られているが、現在関わっている県内のある市町の総合計画の議論の中で、地域に満足していても、例えば子育てや親の介護の関係などで住み続けられないこともあるという話が出た。つまり「地域に満足している」とことと「住み続けたい」ということはイコールではないので、どのような指標を設定すべきか議論の余地があるのではないかと。

また、「住んでいる地域は高齢者にも暮らしやすいと思う人の割合」という指標があるが、高齢者だけでなく障害者も追加することはできないか。県の障害福祉計画では障害者にも暮らしやすいことが掲げられている。

【事務局】

資料では、県民意識調査の設問55問のうち、まちづくりに関係する代表的なものを掲載している。掲載しているものの他に、今の生活に満足しているか、障害者にとって暮らしやすいと思うか、子育てがしやすいと思うか、といった設問があるので、これらを指標として設定していくことも考えられる。現在挙げている10問で良いのかということは今後検討していきたい。

【委員】

県民意識調査の設問内容をこの会議で変更することはできないので、既にある指標のどの部分に注目するのか、どう理解し評価するのかという点に注意すれば良いと思う。

(2) めざすべき将来像及び取組の方向性について

【委員】

どの市町が4つのうちどの地域に属するのかというのはどこかに定義されているのか。

【事務局】

市町ごとの分類を定めてはいない。

【事務局】

資料6の3(3)に4つの地域の例を挙げている。もう少し詳しい内容は、現行基本方針P1の視点2に4つの地域の区分を整理して載せている。

【事務局】

資料6の2枚目には写真のイメージも載せている。

都市中心部は阪神間から姫路までの一帯。地方都市は西脇の中心市街地、豊岡の駅前、丹波篠山の城下町、出石、城崎温泉、竹田城下町などで、幅が広い。多自然地域の集落群は田園風景が広がる中にある集落のイメージで、市街化調整区域や、森を守る区域、森を生かす区域、さとの区域などがあたる。あくまで人が住んでいる地域について空間的特徴を捉えて分類したもの。

【委員】

前回の議論で、4つのゾーニングは市町境界に対応したものではなく、一つの市町の中にも4つの側面を持った地域があるはずなので、それぞれの市町で判断して位置づけてもらうのが良いのでは、ということだった。

その上で、「ベイエリア」という言葉について。いわゆる大阪湾ベイエリアという淡路側も含む表現があるし、また従来のベイエリア論だと、埋め

立て地や工場などの大規模な土地利用転換を想定している地域をどうするかという話題になる。今回のように、都市中心部という意味で「ベイエリア」という言葉を使うべきかが若干気になる。

【委員】

姫路や加古川を「ベイエリア」というのかどうか、とは感じる。「進化し続ける」という言葉は良い言葉だが、もう少し具体的な方が良いのではないか。「兵庫の活力と魅力を高め続ける」とか。そうであるならば、「ベイエリア」というより「市街地」なのかなど。

地方都市と郊外住宅地は、「個性がきわだつ」とか「住みごたえを高め合う」のような良いキーワードがあるし、この地域の都市政策に携わる方にとって目標が分かりやすい。

多自然地域の集落群は「ふるさとを再生する」となっているが、これからは再生するだけではなく新たなふるさと像を創っていく時代なので、「多様なつながりで創る新たなふるさと」といった感じか。

【委員】

先ほど他の委員がおっしゃった内容を伝えるのに「ふるさと」という言葉だと違和感がある。情緒的な言葉で、昭和的なふるさとに戻るといったイメージを抱きがちである。単純に「農村」と言う方が色が無くて良いのではないか。農村は過去に戻って都市は先に進む、ということではなく、どちらも前に進むイメージが良いと思うので、そういう性質の言葉を選んでほしい。「都市と農村」、「アーバンとルーラル」などで良いのではないか。

【委員】

私は姫路にUターンしてまちづくりにチャレンジしてきた。これまで姫路は地方都市だと思ってきたが、兵庫県の中で見ると都心部なのだとこの会議で気付かされた。兵庫県は日本の縮図というが、全国から見た場合と兵庫県の中から見た場合とで、自分の住んでいる地域の位置づけは全く違うのではないか。特にUターンしてきた人にとっては認識のずれが大きいと思う。そういう点も踏まえて、4つの地域をどのような言葉で表現すべきかを考えてみたい。姫路は浜手にある製鉄産業が市を支え、多くの方が働き、まちづくりの中心でもあるので、「ベイエリア」という言葉は悪くはないと思う。

【委員】

姫路や加古川は瀬戸内だが、大阪では、大阪湾だけがベイエリアだと認識されている。

【委員】

加古川や高砂にも製造業の世界企業が多くあるが、地元の人や子どもたちはそのことに魅力を感じているのか。兵庫県の魅力であるのに、十分に知られていないように感じる。工業地帯は住むこととはあまりリンクしないかもしれないが、働くという意味で非常に重要なので、そのことを発信することも重要。

また、自然の豊かな地域と対比することは、選択肢が多くあると提示できることにつながり、良いと思う。

【委員】

私も「ベイエリア」というと臨港地区をイメージしてしまうので、少し違うかなという印象。また、ベイエリアというなら日本海もあるが、日本海側の地域はどこに分類されているのか。

【事務局】

香住や竹野などは、まちの区域なので地方都市になるが、そのほかの多くの地域は、多自然地域の集落群になる。

【委員】

多自然地域の集落群の説明を読むと、森の中に住んでいるような感覚になる。海の姿が見えてこない。兵庫県にはせつかく北にも南にも海があるのだから、言及しておく方が良いのではないか。

「ふるさと」については、皆さんが言われたように、昔のふるさとに戻るのではないということはあるべきだと思う。

さらに言うと、4つの地域の中に、人の暮らしやライフスタイルが見えてこない。まちの将来像なのでハード中心に記載するというのではなく、例えば、大家族で住んでいるのか、一人暮らしの人が多いのか、といった将来像を盛り込む必要もあるのではないか。

【事務局】

田舎は一人暮らし、都会は一人暮らし、のような色付けが必要だということか。

【委員】

めざすべき将来像ということであれば、田舎で一人暮らしをしないでもいいようにしていこう、という方向も考えられる。あるいは、現在すでに半分は一人暮らしなのでそれを前提とした将来像にするのか、様々な世帯が混在していて、その誰もが幸せに暮らせる将来像にするのか。

【事務局】

住まい方や人の考え方は多様であり、それぞれに適したエリアを選択できるようにすることを目指している。今の時代にふさわしい住まい方、ということ。

【委員】

全体として一人暮らしの方が増えていく社会であることを踏まえて、この議論を展開すべきではないかと感じる。

【事務局】

例えばニュータウンは、昔なら若い子育て世代が住んで、というイメージだったが、今となってはそうではない。世代を混ぜていきたいとは思いますが、そうできていない。

【委員】

様々な世帯が混在していて、その誰もが幸せに暮らせる将来像だと思って読めば良いということか。

【事務局】

郊外住宅地のところでは「多世代のバランス」といったことにも言及しているが、それはこの地域が一斉に造成されたために世代の偏りという課題が

生じているからである。他の地域では、バランスを取るというより、多様な暮らし方、多様な家族構成を前提に考えていきたい。

【事務局】

選択して住んでいく時代であるから、農山村でゆったりとした暮らしをしたいと若い人が思えばそれも可能だし、都市部で文化などに触れたいと高齢者が考えればそれも可能。そういう時代だと思っている。

【委員】

「ふるさと」だと地元、古い、というイメージになるが、「みんなのふるさと」みたいなイメージが良いのではないか。誰もが懐かしさを感じたり、ただいま、と帰って行けるような地域に魅力を感じる。

【委員】

「ベイエリア」について、尼崎から姫路までは確かにベイエリアなのだから言葉の使い方は合っている。「ベイシティ」などと言い換えてもあまり変わらないし、これで良いのではと思う。

「兵庫プライドをもったまちづくり」というコンセプトについて、まちづくりにあたって「プライド」のような強い言葉を使う必要があるのか。「兵庫らしいまちづくり」でも良いぐらいだが、弱すぎるので「選ばれる兵庫なまち」などはどうか。

地方都市について、私はこれまで地方都市という概念を考えたことがなかったの、面白いと感じた。多自然地域に暮らす人が買い物に来たり、地方都市からは都市中心部に仕事に行ったりするので、「地域の核」というよりは「中継地」というイメージを持った。

また、都市中心部以外の3つの地域にコワーキングやワーケーションなどで移住者を呼び込もうとするなら、例えば5Gの整備の後押しをしてIT関係者やクリエイターなどに働きかけるなどが考えられる。高い建物が多い都市中心部より整備しやすいし、まだまだ5Gが使えるエリアは少ないので、強みになる。

【委員】

デジタル田園都市みたいなことになると、都市中心部にあまり床は必要なくなる。都市中心部で何をなりわいとして生活を成立させるのか、ある程度共通認識を持っておかないと、この話題の時はこれで成立して、違う話題の時はまた別のもので成立している、というようになってしまう。都市中心部には将来にわたって多くの人が集まり、それによるイノベーションを可能にするためのまちづくりをする、というイメージのはずが、先ほどの話だとそうでなくても成立するということにもなる。

【委員】

環境共生の部分について、今は里山の保全や環境学習の充実といったボランティア寄りの内容が書かれているだけだが、森林や農地を活用したビジネスなども加えてはどうか。

地方都市の「地方」という言葉に違和感がある。中央があつて地方があるという概念に基づく言葉だが、個人的には中央と地方でない関係性を作っていくべきだと思っている。「地方都市」だと言われた都市の心情も気になる。

「地方都市の中心市街地」という表現も「地域の中心市街地」と言った方が分かりやすいのではないか。「地域の中核市街地」とまで言ってしまうと都市中心部との差が見えにくいかもかもしれないが。

【委員】

私も、地方都市については「地域の中核都市」なのだと思う。兵庫県の強みはこれらの都市であって、単なる中継地ではないと思う。そこにはきらりと光る地場産業が多くあり、例えば小野や三木にはヨーロッパから刃物の買い付けに来ているし、豊岡の鞆も世界と取引しているし、淡路島の線香もアロマとしてフランスに輸出されている。このように個々の会社は世界戦略を展開しているし、求人も行っていて、地方に仕事が無いというのは誤った情報である。こういった先入観によって、求人説明会を行っても席にすら座ってもらえない状況がある。地域に多くある魅力は、兵庫の多様性を主張していく上で重要な資源である。

自然環境の保全については、先ほど他の委員もおっしゃったようにボランティアベースの内容だけでは限界があり、これからはSDGsでCO₂の排出権を買わなければならない時代。先日の新聞記事ではヨーロッパの排出権取引市場で1トンあたり60ユーロと報道されていた。トヨタや神戸製鋼が森林を購入したりしているが、企業活動の持続性のためにCO₂の吸収や水資源の確保の場が必要不可欠となるので、そういった資源を提供できる場所という言い方をすればどうか。そして兵庫県としてはその提供をシステム化する、と書けると良いのではないか。企業の森は、従業員の保養の場としての役割も担っている。

【委員】

新たな地域づくりの資源として価値を見いだして評価する視点は大事。

「地方」論については、兵庫県は地方創生についても「地域創生」だと一貫して言ってきた。

【事務局】

4つの地域の仕分けについては、一般の方に分かりやすくする必要がある。一方、コンセプトのところでは「地域の核」と表現している。

【委員】

他の委員がおっしゃったように、確かに海・水についての事例が無いので、漁村や里海など、それらも含むと言うことが分かる表現が必要。

【委員】

古い郊外住宅地では、都市に対する郊外住宅地という考え方はあまり無い。緑の山の中の住まいという感じで、周辺の多自然地域の農産物を楽しんだり、山歩きを楽しんだり。職場も多自然地域にあたりして、住宅地の中で閉じていないことが多い。ここに書かれているのは住宅地の中のことが多いが、住宅地の枠を超えた地域との連携を考える必要がある。エリアマネジメント組織についての記載もあるが、人口密度が低いので、キッチンカーやカフェなどもなかなか成立しない。まちの機能を付加するといっても、住民の多くが「まちを開くぞ」という気持ちを持っていない限り難しい。住宅地内で閉じている限り、発展性が無いのではないか。

新しい郊外住宅地の場合は、ここに書いてあるように ZEH などの機能を散りばめることで良い住宅地になっていくと思うが。

【委員】

大きな考え方としては、専用住宅の塊というのはだめで、多様性が必要だということ。都心の方ばかり向いている郊外住宅地は、都心から離れるほどダメだというのはみんな分かっていること。新しい魅力や機能をどう付加していくか。

郊外住宅地のデグレード（劣化。価値の低下。）がアメリカでは実際に起きている。放っておくとそうなるという問題意識を持った上で、それを食い止めるために、多様性、周辺の働く場所、ライフスタイルなどの新しい提案をしていかないと、生き残れない郊外住宅地が多発する。

【委員】

周辺を見ると解決のヒントが得られるということを書いておいてほしい。

【事務局】

それは周りの集落も含めてか。我々としては溶け込んでいくしかないと思っているが。

【委員】

溶け込むことも難しいことではあるが、やっていくしかない。

【委員】

コワーキングやテレワークの記載があるが、通勤時間が無くなることで空いた時間をまちづくり活動やボランティアに使ってもらえるよう誘導することが必要。自分のまわりの地域も含めた連携について考える入口になるようなテレワークスペース、コワーキングスペースにしてみたらどうか。私自身、名谷駅前の公園内の空き事務所にテレワークスペースをつくり、来た人に落合中央公園のリノベーションを考えてもらうという取組を始めて、わりと来てくれる人もいます。こういう取組が郊外住宅地の再生の一助になるのではないか。

【委員】

若い世代で地方創生に興味を持っている人は多い。私も、兵庫県の魅力というところを地方都市にあると感じている。ただ「個性きわだち誇りのある地域の核」というのは分かりにくい。私は「歴史や文化、兵庫の資源が集積する兵庫県のハブ拠点」というイメージを持っている。一方ベイエリアは、世界とも結び、兵庫県内のローカルな地域とも結びながら外向けに発信する「グローバルなハブ拠点」というイメージである。

【委員】

多自然地域の集落群のところで、森や林業のことも入れた方が良く思う。災害やカーボンニュートラルなどとも関連する。

小学校等のバリアフリー化については多自然地域の集落群だけに記載されているが、バリアフリー法の改正で公立小学校等が特別特定建築物に追加されたことに伴って今後力を入れていくのであれば、他の地域にも盛り込んでも良いのではないか。避難所のバリアフリー化とも関係する話である。

(3) 骨子（案）について

【委員】

「兵庫プライド」というのは、「シビックプライド」に触発されて出てきた表現なのか。あるいは「プライド・オブ・プレイス」という本もあるが。

【事務局】

兵庫らしいというだけでなく、県民全体で共有して一丸となって進んでいこう、という思いを表現した。

【委員】

シビックプライドというと、住んでいる人だけでなく、出身者や、あるいはゆかりは無くてもその地域を応援しようということ。Jリーグのコンセプトに近い。そういう点を意識したのかなと勝手に思った。

【委員】

地方都市にも世界に誇れるいいものも多くあるが、工場で生産されてそのまま海外へ出荷されてしまうので、一般消費者にはあまり知られていない。それらを顕在化させ、そういうものがある地域なんだとみんなで表現して発信することにより、結果的に選ばれる兵庫になる。そういう気持ちをもってまちづくりに取り組もうよ、という県から市町や県民への呼びかけが必要ではないかと思い、「プライド」という言葉を使った。言い過ぎなのであれば、「選ばれる兵庫を実現する」などでも良いと思う。

【委員】

4つの地域の設定と、コンセプトの間に少し距離がありすぎると感じる。便宜的に4つの地域に分けているが、全てに共通して目指すべきものがある気がして、例えばイノベーション、循環、コミュニティ、エネルギーといった表現はどの地域にも出てくる。それらのキーワードを間に挟むか、あるいはそれをそのままコンセプトにするかした方が良いのではないか。

「プライド」という言葉については他の委員と同じような感覚で受け取ったので違和感はない。守りの部分と攻めの部分が両方大事だと思うので、例えばそれを「プライドとイノベーション」と言うか「保守と創造」と言うかでイメージが全く変わる。「プライドとイノベーション」などはこれまでの兵庫県ならあまり使わなかった言葉かもしれないが、今回はそれでいこうとなるのかそうではないのかは、事務局で考えてもえらえれば良いと思う。

【委員】

他の委員も近いことを言われていたが、人口減少社会で一人暮らし世帯も増えていく中で、どんな豊かな暮らしができるのか、まちづくりとはそのためのものだ、ということはある話。多様な暮らし方をいろいろな地域で選ぶことができる点が兵庫県の魅力だと思うので、望む暮らしができるという大きな話を4つの地域に分ける前のところで盛り込めると良いのではないか。

【委員】

「選ばれる兵庫」という表現が良いなと感じた。「選ばれる兵庫、多様な住み方・働き方を選べる兵庫」というのはどうか。

個人的に、学生から40代ぐらいの方20人程度にアンケートをとったとこ

ろ、兵庫県のイメージは「まあまあ良い」という感じだった。イメージがふんわりしている。個性をどう表現するか。つまり兵庫プライドの中身が何なのか、核として何の分野でナンバーワンを目指すのかということコンセプトとして表現できると良い。それを言葉で聞けた方が県民にもイメージしやすいのではないかと感じる。

先ほどのアンケート結果では、兵庫県は子育てしやすいと感じられているようだが、働く環境については、魅力的な地場産業などもあるがあまり知られていないからか、あまり魅力的ではない、との回答が多かった。

【委員】

皆さんの意見に共通するのは、基本コンセプトに至る、兵庫県が目指す暮らし方やまちの形についての説明がきちんと書かれている方が理解されやすいということ。

【委員】

コロナ禍で食や健康に注目が集まっているので、一次産業に関するナンバーワンが提示できると良いと思う。安全・安心なものを食べたいというニーズがあるので、その土壌としてのハードが兵庫県にはある、というような。

【事務局】

これまで創ってきたまちをどう引き継いでいくかということが王道であり、大事なこと。ただ、時代が変わって足りなくなっているものを補い、少しずつ変革を起こしていくことも必要。この部分をどう味付けしていくのか、いただいた意見を取り入れながら、見せ方をしっかり考えていきたい。

【委員】

方向性としては、より地域の方を充実させていこうということだと思う。その時に、全体の人口が増えない中で都市中心部をどう成り立たせていくのかという視点が必要。例えば、今までのようには都市中心部に人が集まらず半分ぐらいしか人が来なかった場合に、既に存在する都市中心部の資産をどう使っていくのか、ということ。他の3つの地域の充実ばかりに言及すると、都市中心部の課題が大きくなるのではないかと。

【委員】

多自然地域や地方都市に人口が増えるといっても100万人単位で増えるわけではないだろう。うまくいって数万人程度か。ということは、大都市圏においても大規模な人口減少が起こるわけではないので、都市的なアメニティの集積は続くと考えられる。ただ、トータルで見ると確実に人口は減少するし、近畿圏で言うなら国土軸の地域でしか人口は維持できないと言われている。その他の地域では人口が減るという前提で、その中でどう魅力を高めていくのか、数万・数十万人単位の都市部からの人口分散を、地域でどのように受け止めていくのかという議論だと思う。

【委員】

雑談になるが、資本の力が大きくなったことで都市の画一化が進んでいて、三宮も昔のような三宮らしさが無くなっていると感じる。姫路と岡山の駅前もほとんど違いが無い。そういった議論も、この会議でなくても良い

が、どこかで議論する必要があるのではないか。

【事務局】

委員が危惧されているように、三宮におけるクロススクエアの打ち出しなど、三宮らしさを出していこうとしている。海とのつながりが三宮の魅力なので、ウォーターフロントへいかに導けるかが大事だと考えている。

【委員】

開発の仕方が東京やポートランドや、他都市と一緒にやり方でやってしまうと、らしさは無くなってしまおうと思う。

【委員】

地方都市の中心部がどこも一緒になっているというのは昔から議論されていることだが、最近では大都市も、ということだと思う。放っておくと画一化のベクトルが働いてしまうので、都市政策としてどう打ち出すかは腕の見せ所である。

【委員】

自分の居場所がある、自分の暮らしが見つかる、ということがとても大事である。こういう暮らしをしたいと思ったときにその場所を選べる兵庫県だということを基本コンセプトとして打ち出せれば、4つの地域の話ともつながる。「私の居場所を見つけられる兵庫」とか。

【委員】

齋藤知事が「ボトムアップ型県政」と言っているが、県民主体という部分で通じる部分があるのではないか。一人一人が主体というのが良い。

【委員】

住んでいる人の姿が計画の中に見えないと言ったが、まちづくりの議論だとは言え、住むのは人なので、自分の創りたいまち、というのは大事。